月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2013年5月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊25年目
創刊 1989年 No. 287

Peter Paul Rubens 『Rubens Sohn Nikolaus mit roter Filzkappe, 1625-1627 Albertina, Wien アルベルティーナ特別展『Bosch Bruegel Rubens Rembrasndt. Meisterwerke der Albertina』6月30日まで開催

杉本純の原子力の話 II
ウィーンと京都 19

三月二六～二八日にかけて近畿大学において日本原子力学会春の年会が開催された。福島原子力発電所事故後では四回目の学会開催である。初日午前の「いま福島が原子力学会に期待すること」と題する一般公開の特別講演では、川俣町から「原発事故からの復興に向けての現状と課題」、福島県から「福島県の除染対策について」の二件の講演があった。最初の講演では、急遽出席できなくなった古川町長がビデオで川俣町の復興の状況について説明されるとともに、事故収束に向けた原子力学会の支援を「力を貸して欲しい」と訴えられた。二件目の講演では、福島県における除染作業の状況が詳細に報告された。廃棄物の仮置き場の確保、事業者等の育成・確保などの課題についても触れられた。いずれも、地元の復興作業の大変さがひしひしと伝わる内容であった。

筆者は、福島原子力発電所事故の解析などのセッションで討論に参加するとともに、一日目午後の総合講演「国際原子力人材育成大学連合ネットの構築とモデル事業の成果」において、「戦略的国際原子力教育の成果」と題する講演を行った。京大が幹事校を務めたタイを始めとするアジア七ヶ国に対し、各五日間の出前講義を行い、地元の大学を中心に三年間で計三八六名の現地研修生の参加があり、「原子炉を導入する我が国にとって貴重な情報を教えて頂いた」など各国の反響は極めて良好で成功裏に完了したことを報告した。この間に構築した貴重な人的ネットワークを維持拡大してゆくことが今後の課題であることが関係者の共通の認識となったと思う。

さて、今月のウィーンと京都の類似点では、両市の有名な散歩道について述べてみたい。ウィーン郊外のハイリゲンシュタットには「ベートーベンの小径」と呼ばれる散歩道がある。小川沿いの木立の中のこの道を歩きながら、ベートーベンが交響曲第六番『田園』の曲想を得たと言われている。今は高級住宅地の中の緑あふれる道となっている。道の近くには彼が暮らしたハイリゲンシュタット遺書の家もある。聴覚を失ったことに絶望したベートーベンは、一八〇二年に弟に宛ててここで遺書を書いたという。中は記念館になっており、デスマスクや楽譜、小さなピアノなどが置かれている。ベートーベンの小径は、ハイリゲンシュタットからホイリゲ街のあるグリンツィングまで延びている。

一方、京都の東山山麓には「哲学の道」と呼ばれる小道がある。京大教授の哲学者・西田幾多郎がこの道を散策しながら思索にふけったことからこの名がついたと言われる。元々は「思索の小径」と呼ばれていたものが、いつしか「哲学の道」と呼ばれるようになった。哲学の道は南禅寺付近から銀閣寺まで琵琶湖疎水に沿って延びており、疏水の両岸に植えられた桜がみごとで、春や紅葉の季節には多くの観光客でにぎわう。道の中ほどの法然院近くには、西田が詠んだ歌「人は人 吾はわれ也 とにかくに 吾行く道を 吾は行くなり」の石碑がある。いずれも、両市出身の偉人の着想に結び付いた散歩道であり、現在は観光名所として親しまれていることが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、春先にベートーベンの小径を散歩しては、本当にのどかな気分を味わった。哲学の道は下宿に近かったこともあり、学生時分によく通ったが、ここ一、二年も家内や京都を訪問した娘と良く散歩した。初夏の夜、蛍を観賞にきたこともある。両市の有名な散歩道を満喫できた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたベートーベンの小径の写真を欄外に掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■